

会議名	中山間地有畜農業ワークショップ 2007 “家畜とあゆむ里と山”
開催日時	平成 19 年 11 月 27 日(火)13:15～11 月 28 日(水)
開催場所	佐久勤労者福祉センター(長野県佐久市)
主催者	(独)農業・食品作業技術総合研究機構畜産草地研究所
参加人数(概数)	120 名
1. 会議の概要 (資料添付)	<p>第 1 日目は中山間地の環境、農業問題、畜産の位置づけ、農地管理など多面的に理解を促す基調講演が、第 2 日目は特別講演として第 1 日目の基調講演の具体的例示とポスター発表が行われた。</p> <p>第 1 日目</p> <p>4 題があり、その概要。</p> <p>1. 中山間地域の農畜産業と里山の変遷 農業技術研究所 生物多様性研究領域 山本勝利</p> <p>山本氏の専門は生物多様性ということで、多様な生物叢を育ててきた日本の原風景的な山、里山、集落、水田、畑を中心とする環境の変化を自身の子供時代のからの体験を交えながら述べるとともに、人が自然に働きかけることで成り立っていた生物多様性が、今後の高齢化と過疎化の中で、人手の入らない土地が拡大によって失われていく危うさを説いた。</p> <p>2. 獣害を防ぐための農地管理 中央農業総合研究センター 鳥獣害研究サブチーム 竹内正彦</p> <p>竹内氏はイノシシの研究者として知られている。今回はイノシシにとって牛はどのようなものであるか、獣害予防に牛が役立つのか、自己の実験例を示しながら講演した。その結果、イノシシと牛は互いに特別に意識する関係にはならず、人の使っている農地との間にゾーンとして牛の放牧地を作るだけでは獣害は減らないこと。ただ、牛ゾーンを設定して、身を隠す遮蔽物が全くなくなることは、イノシシにとっては不安な環境条件となる。ただ、そのような場所へのイノシシの進出に対し、人が無関心で過ごすと、のさばるので、のさばらせない注意が肝要。</p> <p>3. 中山間地における有畜農業の役割 畜産草地研究所 山地畜産研究チーム長 池田哲也</p> <p>中山間地域では過疎化と農業従事者の高齢化で耕作放棄地の増加が大きな問題となっている。このような中山間地域の土地管理に約 10 年前から山地畜産部で取り組んでいる「小規模移動放牧」が如何に有効であるか、また、それを実施するための具体的な道具立て等を紹介。</p> <p>4. 農地資源の保全と粗放管理 新潟大学農学部 生産環境科学科教授 有田博之</p> <p>農地「資源」として維持するためには、最低限の維持が必要。全く維持管理をしなくなると復元コストが非常に大きくなる。とくに水田においては 3 年以上放棄すると費用が大幅に増える。小規模放牧で使わないとしても、最低限湛水化だけでもやるべき。</p>

	<p>第2日目は特別講演として下記の2課題とポスター発表が3つのセッションに分けて催された。</p> <p>1. たかが「イノシシ」、されど「山くじら」～鳥獣害対策から見えてくる地方圏の地域像、そして地域個性～ 島根県美郷町 産業振興課 安田 亮 害獣対策から一步踏み出して、資源化、地域振興に持っていった事例報告。 「害獣」という捉え方では、行政依存、補助金依存、猟友会依存、組織力なし。そこで視点を変えて、地域の「資源」として捉え、駆除と狩猟の区別、受益者の駆除組織「山くじら組合」、イノシシの差別化（現地証明、肉質データ、処理技術）販売 女性部の活躍で地域特産品として販売。ただし畑を守ることと優先し、資源（イノシシ）枯渇を防ぐ。補助金依存からの脱却。 今後の害獣対策の一つの提案である。</p> <p>2. 小規模放牧の現状と発展可能性 畜産草地研究所 山地畜産研究チーム 宮路広武 報告した宮路氏は農経が専門で、小規模移動放牧が耕作放棄地の活用（農地管理の一助）とか牛の省力管理という技術的な側面で捉えられてきたのに対して、これを縮小傾向にある和牛生産の効率化、繁殖経営の面で見るとどうなるかについて、いくつかのパターンについて検討している。ただ、まだ現実の事例が少なく、今後の発展に期待をするという理論的報告。</p>
<p>2. 今後の研究開発分野として重要と思われる課題・話題</p>	<p>1. 中山間地域の過疎化・高齢化と 利便性の追求の中で地域資源が資源でなくなった（として認識されなくなった） 里山の活用（田畑、薪炭資源 etc）放棄（イノシシ、サル、シカなど）野生動物の生活圏拡大 居住地域との接触、隣接へ <u>里山の復活はあるのか？その方法は？</u></p> <p>2. 「米あまり」による傾斜地など条件不利耕作地・水田 + 小区画の平坦地水田の利用不活発化 転作作物の利益小 水田の耕作放棄へ <u>水田の利用活性化はできるか？</u></p> <p>3. 放棄された里山 + 放棄された田畑 耕作放棄地は（関東も）どんどん広がっている イノシシ、サル、シカなど畑の害獣の増加と人里への侵入 耕作不能 耕作放棄（せざるをえない）土地の拡大 <u>省力的管理方法は？</u></p> <p>4. 今回のワークショップは ~ に対応できる農業方策は有畜農業ではないか。すでに、畜草研山地畜産部では10年前から「小規模移動放牧」の技術を蓄積し、普及に努めている。</p> <p>5. 今後の重要分野 ・「小規模移動放牧」の応用範囲の確認（害獣対策も含め）。 ・「小規模移動放牧」の技術の簡易化はできないか？水の確保。電気牧柵の張り方。転牧。ウシの越冬。 ・「小規模移動放牧」は害獣に対応できるか？ ・「小規模移動放牧」の生産性の確認 生産性の高い活用方策は他にないか？</p>

<p>3 .その他の発表 課題で関心のあ ったもの</p>	<p>イノシシの「地域資源化」は面白い発想である。「地域名産品として銘柄化」するとして、全頭捕獲はせず、ほどほどに翌年のために残すのは、自然とのイイ折り合い方といえると思う。</p>
<p>4 .今後研究開発 課題採択に当た って参考とすべ き事項等</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・今後の日本の農業の動向を考えたとき、社会的要請の強い研究分野か？ ・核となる技術があるか？ ・技術コンセプトがしっかりしているか？ ・周辺技術の開発、共同研究をやる中心人物がいるか？ ・長期的研究は次の世代に引き継いでいけるだけの組織力、背景があるか？ <p>以上の視点で採択して見る必要がある。</p>
<p>5 . 会議の所感</p>	<p>一般の研究者は研究報告が短時間に大量にできる課題、その多くは基礎的研究を喜んでやるが、多方面の技術の終結が必要な課題は敬遠する傾向にある。しかし、畜産も農業の一分野なので、成果はすぐに出なくとも（「小規模移動放牧」はからこれ10年の歳月がかかっている）「地面に足のついた」研究にも取り組む必要がる。</p> <p>今回のワークショップで「小規模移動放牧」という畜産技術が試験場技術から一般農家技術へと、畜産から耕種へと広がりをもち始めていることに感激した。</p>
<p>報告書</p>	<p>古川 良平</p>